

屈輪について



中国の漆芸の文様として、屈輪（ぐり）というものがあります。これは和名で、俱利とも書き、あるいはグリグリとも俗称しますが、中国では雲頭文とか如意文とか呼ぶようです。一般に渦巻文、蕨手文などの曲線の連続文様で、いかにも中国の文様らしい厳密さと力強さがうかがわれます。屈輪は堆朱（ついしゅ）や堆黒（ついこく）の文様として多く用いられました。

堆朱は中国漆器の技法の一つで、朱漆を塗り重ねて厚い層を作り、これに文様を彫刻したもので、中国では剔紅（じっこう）と言います。唐代にはじまったと言われますが、宋代からさかんになり、元代の張成や楊茂はこの技法の名手として知られました。また堆黒は堆朱と同じ技法ですが、黒漆を用いたもので、中国では剔黒（じっこう）と呼びます。堆朱や堆黒の器は室町時代の日本に数多く輸入され、大へん珍重されました。「堆黒屈輪大盆」(写真右)は、中国の元時代の作と推定される漆器で、この種のものとしてはまれにみる

大きさを誇っていますが、日本人はこの異様に力強い浮彫文様にことに興味を持ったようです。

次に、日本の漆工技法の一つである鎌倉彫は、木地に直接に浮彫り風の文様を彫りだし、ふつうはまず黒漆を塗ったのちに、朱漆を塗りますが、ときには緑漆でさらに彩色を加えたものがあります。中国の堆朱や堆黒にならって生まれた技法と思われませんが、その遺品のほとんどは室町時代以降に集中しています。鎌倉彫の名は、中世の鎌倉でこの技法が発達したのに基づくのでしょうか。古い鎌倉彫の遺品のなかには、手ずれや畳ずれのために、上塗りの朱漆の一部がはげて、下塗りの黒漆の一部があらわれているものがあり、ことに深い味わいがあります。

「鎌倉彫屈輪香合」(写真左)はそのような遺品の一つで、室町時代の作です。これは明らかに中国漆器の屈輪文様を写しており、この文様に対して当時の日本人のいだいた興味がしのべれます。

季刊 美のたより No.38

昭和52年 1月20日

発行 大和文華館